

## つながりへの没入とアイロニー：想像し続けるための方法論

私は2018年から《LIFE,SAVE,AH~》というシリーズの作品を制作している。この作品は、2018年の1月に、私がアルバイト先の新年会で泥酔した際に「ライフジャケットを着た人物の幻」を見たことがきっかけで始まったものである。幻といっても、それは神秘的で超常的な類のものではなく、私を介抱してくれた同僚が着ていたオレンジ色の分厚いダウンジャケットが「ライフジャケット（救命胴衣）」に見えたことがきっかけで起きた単なる見間違いであった。単なる見間違いではあったのだが、私にはそのライフジャケットを着た人物のイメージが「私にとって重大な何か」を暗示しているように思えたのであった。ただ、私はその幻＝イメージが自分にとって重大であることを直観していながらも、なぜ重大であるのかが全くわからなかった。

この感覚について説明するためには、私が元来イメージに翻弄されがちな人間であるということ伝えておかなければならない。「ライフジャケットを着た人物のイメージ」は未だかつてない方法で私を翻弄してきたのであり、その特異性について語るには通常時の翻弄のされ方について記述する必要があるからだ。

思考の仕方というものは人それぞれであるが、大きく分けるとイメージ（動画や静止画）と言語に分類されるだろう。私は、ほとんどの場合イメージで物事を捉えている。例えば、「今日の晩御飯は何にしよう」と考える際、脳裏ではファミリーレストランのメニュー表のように数種類の料理の画像が展開され、一番美味しそうに見えるものを探す。街中で何か気になるものを目にすると、Googleの画像検索のように、記憶にある対象と似たイメージが自動的に列挙され、そこからしばしのあいだ画像から画像への連想ゲームのようなものが始まってしまう。

こういったイメージによる思考方法がGoogleの画像検索に似ているという描写は、動物学者のテンブル・グランディンが『TED』というプレゼンテーション番組で自分の思考方法について語っていた時のものを参考にしている。<sup>1</sup>それは、私が彼女の思考方法を聞いた時に、これは自分の話かと錯覚するほど共感したからである。

グランディンも語っていたことであるが、イメージが具体的に想像できてしまうと、「大まかな話」や「概念的な話」よりも、細部に興味が向いてしまう。例えば、教会の話題がでると、脳裏に記憶上の教会の画像が展開される→1つの教会の画像が気になる→教会のファサードに目が行く→ファサードの装飾のレリーフの図柄…というふうに細部に注視し始めるため、教会の話をしている最中にいきなりレリーフの図柄の話をしてしまって相手を困らせてしまったり、話の筋がわからなくなってしまったりすることが度々起こる。

しかしながら「ライフジャケットを着た人物のイメージ」はとても気になる対象であるにも関わらず、私の脳裏には画像が展開されなかった。この感覚を例えるなら、突如として自分のPC画面に、膨大な量の画像データが圧縮されているzipファイルが送られてきたが、そ

<sup>1</sup> TED 「テンブル・グランディン：世界はあらゆる頭脳を必要としている」

[https://www.ted.com/talks/temple\\_grandin\\_the\\_world\\_needs\\_all\\_kinds\\_of\\_minds?language=ja](https://www.ted.com/talks/temple_grandin_the_world_needs_all_kinds_of_minds?language=ja)

のzipファイルを解凍するコマンドが分からないような状態である。普段はペラペラな画像が脳裏いっぱい展開されるが、「ライフジャケットを着た人物のイメージ」には厚みのようなものがあり、私はその厚みだけを感じたのである。この立体感が私に「重大な」という印象を与えるのであった。

《LIFE,SAVE,AH~》シリーズは、「ライフジャケットを着た人物のイメージ」を解凍する方法を探すことから始まり、試行錯誤を経て展開された諸々のイメージを用いて、その幻が自分にとって何を暗示していたのかを探るという作品である。「ライフジャケットを着た人物のイメージ」が私に何を暗示していたのかを探っていると、このイメージがこれまでの人生における印象的な出来事や、今まで忘れていたような些末な事柄など、思いもよらぬ形でつながりを見せるようになっていった。そしてこのように、つながりが見出された時、私はそれらが示す内容によって想像を掻き立てられ、新たなイメージ群が脳裏に展開されるのである。私はこのつながりを見出す作業に何故だかとてもスリルを覚え、いつまでもつながりを見出したいという欲望を抱くようになった。

だが、この私の欲望はいったいどこからくるものなのだろうか。このような問いが私の中に芽生えた時、昨今問題視されている陰謀論者の存在が気になるようになった。陰謀論者は、世の中で起きるあらゆる出来事を、とある陰謀の物語に接続しようと努める。彼らがそのように振る舞うのは、彼らにとってこの世界があまりにも理不尽で複雑で予測不可能だからである。つまり、陰謀論はややこしい話を明快に説明してくれる便利な道具なのである。いつの時代にも陰謀論や陰謀論者は存在するが、インターネットの普及によって気が遠くなるほどの情報と向き合うことになった人類は、今まで以上に世界を短絡化することを余儀なくされた。SNSによって、自分なりの世界の短絡の方法を発信することができるようになった。こういった個人的な情報収集と整理、その情報の発信が陰謀論の温床となっている。

私も陰謀論者と同様につながりを見出すことに執着してはいるものの、一部の陰謀論者の欲望と私の欲望は全く異なっているように思う。陰謀論者は時に、彼らの考えや彼らが信奉する物語にそぐわない物や人を攻撃することがある。彼らの主眼はつながりを見出し続けることや、つながりによって掻き立てられる想像の波に乗り続けることではないのである。むしろ、世界の真理を見つけて思考を停止すること、最終的には想像力が寄り道したり飛躍したりする余地をなくすことなのではないだろうか。もしそうであるならば、陰謀論者と私の目的は真逆である。私はいつまでもつながりを見出しつづけたいと考えており、想像の舵が取れなくなることを欲望している。それ故、私は「つながりを見出すこと」よりも「どのように想像力の柔軟性を保つか」ということに重きを置いている。本論は、その方法について制作を通じて探求するものであり、同時に今日において想像力の柔軟性を保つ意義とは何かを検討するものである。

第1章では、そもそも何故私は、あるいは我々はつながりを見出してしまおうのだろうか、という疑問について、人間の本能やイメージの観点から考察を行なっていく。まず、断片的な情報につながりを見出してしまおう人間の心理について、人類学者のカルロ・ギンズブルクのテキスト『徴候—推論型範例の根源』の一節を皮切りにし、物理学者の渡辺慧が説いたパターン認識という概念を用いて考察を行っていく。その上で、視覚情報におけるつながりの発見について詳しく言及するため美術史家バーバラ・M・スタフォードによるアナロジー（類推）の理論を参照する。そして、昨今のインターネットにおけるパーソナライズ化が想像力を硬直化させてしまうような構造であることを引き合いに出しながら、想像力の柔軟性を保つ取り組みにどのような意義や可能性があるのかを述べていく。

第2章では、想像力の硬直化やマンネリズムを避けるために、自己の想像したことを俯瞰する手段として、想像によって喚起されたイメージを外在化し、距離をとって眺める方法について検討していく。まず、アンコントロールな想像活動や、それに伴って横滑的に生産されるイメージを明瞭化するためには有限性を設けることが不可欠であるということについて論及する。次いで、ドローイングによって明瞭化されたイメージの束を「一望」するという方法とその意義について論を展開させていく。「一望」という視覚の形式がどのような効果をもたらすのかについては、イメージ学者のホルスト・ブレーデカンブが行ったライブニッツの『普遍アトラス』への考察を参照する。「一望」の具体的な実践としてはアビ・ヴァールブルクの図像学研究法、三中信宏のダイアグラム論を参照する。そして、第3章への足掛かりも兼ねて過度なパターン認識に陥っている者の典型例である陰謀論者がしばしば制作する「クレージー・ウォール」についての考察を行う。

第3章では、つながりの創出や発見＝パターン認識によってもたらされる想像力を享受し続けるためにはどのような方策があるのかということ独自の制作理論（まじめな没入者と道化）として展開していく。陰謀論者のような過度なパターン認識のあり方や偶然性の排除が想像力を硬直させる恐れがあることについて触れた後、アイロニカルに自己を捉え、滑稽な存在として自己を茶化す視座を設けるという方法の可能性について検討したい。この章ではまず、アイロニーが没入している状態の主体にもたらす効果について概観したのち、ドイツ・ロマン主義におけるアイロニーの概念と創作との関係を紐解いていく。そして、そこから導き出された没入者（つながりを見出すことに没入している自己）と道化（没入者としての自己を眺めるメタ自己）という構図を用いて、想像力に柔軟性を付与する方法について検討する。

第4章では、第3章で述べた制作理論を踏まえた上で、過去作『青いポロシャツを着たおじさんと八木恵梨（2017）』と、博士審査展にも出品する予定の『LIFE,SAVE,AH~』というシリーズの作品について解説していく。

第5章では、論文と作品の制作で明らかになったことを振り返り、今後の作品の展開や作家としての展望について述べる。